

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：新学術領域研究（研究領域提案型）

研究期間：2012～2016

課題番号：24101007

研究課題名（和文）古代西アジアの文字文化と社会 前2千年紀におけるユーフラテス中流域とハブル流域

研究課題名（英文）Scribal culture and society in the ancient western Asia - the Middle Euphrates and Habur areas in the second millennium BC

研究代表者

山田 重郎（YAMADA, Shigeo）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30323223

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,200,000円

研究成果の概要（和文）：前2千年紀のメソポタミアとシリアの各地で発見された多様な楔形文字文書史料のもたらすデータを総体として視野に収め、当該地域の書記伝統、暦法、祭儀、行政・社会制度の諸相を包括的に捉えるべく、国際的共同研究を実施した。3度の国際会議をへて、特に、（1）前2千年紀初頭から前1千年紀前半にかけての各地における書記教育のカリキュラムと書字法の特徴ならびに相互関係、（2）同時期の各地のカレンダーシステムと月名の異同、（3）前1千年紀に当該地域に帝国として君臨したアッシリアの政治、行政、社会、宗教、書字文化の諸問題を解明した。

成果は、3冊の英文モノグラフとして出版を計画し、一冊をすでに出版した。

研究成果の概要（英文）：The project dealt with the data of various cuneiform documents originating from different sites in Mesopotamia and Syria in a holistic manner, in order to understand comprehensively the aspects of cultures and societies of those areas in the second millennium BC and thereafter. Holding three international academic meetings, we have intensively studied and discussed the following subjects: (1) the characteristics of scribal curricula and scribal traditions in different areas and their relations with each other; (2) the calendars and festivals in various cities in the areas and its difference and interrelations; (3) various questions relating to the politics, administration, societies, religion and scribal culture of the Assyrian empire. We have planned to publish three monographs in English following our meetings, and have already published one of them.

研究分野：アッシリア学

キーワード：古代西アジア メソポタミア シリア 楔形文字文書 歴史 文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 人類最古の文字文明が栄えた古代メソポタミア世界の研究は、19世紀以来、メソポタミア中・南部に位置する諸遺跡の調査を中心に進展してきた。そうしたなか、ユーフラテス川中流域とシリア北東部を流れユーフラテス川に合流するハブル川の流域は、メソポタミアとシリアを結ぶ回廊として歴史的に重要な役割を果たしたことが知られてきたものの、メソポタミア文明地域の辺境と見なされ、当初大きな注目を集めなかった。しかし、1970年代以降、ユーフラテス中流域ならびにハブル流域に点在する大型遺跡の発掘調査が進み、それらの遺跡から楔形文字史料が多数発見された結果、前2千年紀の同地域についての詳細が近年急速に明らかになって来た。特にユーフラテス中流域のテル・メスケネ遺跡、テル・アシャラ遺跡、ヒルベト・エ・デニエ遺跡、ハブル川上流域に位置するテル・レイラン遺跡、テル・フエラ遺跡、また同下流域に位置するテル・タバンの遺跡、テル・シェイク・ハマド遺跡などからそれぞれ百点を超える前2千年紀の粘土板文書が発見され、当該地域の重要性が認知されるようになった。

(2) 1997-2010年にテル・タバンの遺跡で実施された国士舘大学による発掘調査では、わが国の発掘隊としてははじめて500点を超える楔形文字文書史料が発見され、ハイデルベルク大学のS. Maul、筑波大学の山田重郎(本計画研究代表者)ならびに柴田大輔が、これらの文書を解説・研究・出版してきた。テル・タバンの遺跡出土文字資料は、前18世紀後半の粘土板文書(行政文書、書簡、学校文書)(約30点)、前13世紀後半から前12世紀前半の粘土板文書(行政文書、書簡、宗教文書)(約250点)、前12世紀前半から前11世紀前半の粘土製円筒、釘、レンガに刻まれた建築記念碑文(約300点)からなり、これらの文書の研究により、テル・タバンの遺跡がメソポタミア各地で出土する楔形文字文書史料に頻りに言及される古代都市タバトゥム/タバトゥであることが証明され、前2千年紀の異なる時期におけるこの都市とその周辺の歴史と文化が明らかになってきた。すなわち、前2千年紀前半、同市は、南方のユーフラテス中流域に位置するマリ市やテルカ市を拠点とする王国の政治的・文化的影響下にあったが、前2千年紀後半には、東方のティグリス中流域を拠点とする大国アッシリアの影響下に置かれながら、「マリの地の王」を名乗る在地領主の地方王朝が同市を中心とする独立した行政圏を維持していた、という実態が明らかになってきたのである。

(3) こうして前2千年紀の様々な時期と場所(都市)に由来する多くの新たな文書史料が現れるなか、多様な史料のもたらすデータを包括的に視野に収めることが急務となっ

てきた。こうした努力は他に先駆けてドイツとフランスの研究者の間で行われ、特定のテーマ(「前2千年紀の上部メソポタミアの歴史地理」)について複数回の共同研究会を行い、その結果を論文集の形で公表して成功を収めている。この成功に倣い、本研究計画の代表である山田も研究助成金(日仏交流促進事業<SAKURA>)を得て、日本とフランスの研究者との間で当該期のハブル川流域の歴史地理をテーマに定め、2009年から2010年までの2年間にパリと筑波で計4回の研究会を持ち、双方のデータを交換し、その成果を2013年1月に、*Revue d'assyriologie et d'archéologie orientale* 誌の特別号に編著者としてまとめ、出版した。こうした共同研究は、個別の遺跡ごとに研究が細分化されやすい状況を克服し、興味深い研究成果をもたらしたが、一方で歴史地理という課題にとどまらず、より広い視野に立った共同研究や情報交換が必要であることを示した。

2. 研究の目的

(1) 本計画研究は、政治史や歴史地理にとどまらず、書記伝統、暦法、宗教祭儀、行政・社会制度、産業と物流など楔形文字史料が情報を提供し得る複数のテーマを取り上げ、域内での諸都市・諸王権の文化的・社会的・政治的関係を包括的に捉えることを目的とした。

(2) 具体的には、研究代表者自らが従事するテル・タバンの文書の解説作業の進展に上乘せして、上述の様々なテーマについての研究を進めることとし、1年間の準備期間をへて、研究期間の2年目から4年目まで3年間にわたり年に1度ずつ合計3回、当該地域の様々な遺跡から出土する楔形文字文書史料を研究している欧米の研究者を筑波大学に招聘し、以下のテーマを定めて研究会を行う計画をたてた。:

第1回 「書記教育と書記伝統」

第2回 「暦法と祭儀」

第3回 「行政・社会制度と産業・物流」

(3) そして、研究会の成果をそれぞれ個別のモノグラフ(英文)にまとめ、学界に成果を公表することにした。

3. 研究の方法

(1) 一年半の準備をへて、2013年12月5-6日に第1回の研究会議を“Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC: Scribal Education and Scribal Traditions”(「前2千年紀のユーフラテス中流域とハブル流域における文化と社会：書記教育と書記伝統」)として、筑波大学キャンパス内において開催した。会議参加者の一人である N.Veldhuis が 1997

年にフーニンゲン大学に提出した学位論文 Elementary Education at Nippur 以来、メソポタミアとその周辺各地で発見された書記学校に所属する諸文書が考古学的脈絡を考慮しながら精密に研究され、書記学校のカリキュラムをはじめとする各地の書記教育の諸相が明らかになってきた。現在、メソポタミア、シリア、アナトリア、エジプトなどの各地で、いつ、どのような教材を用いて、どのような書記教育が行われたのかを検証することが、楔形文字学の主要な研究テーマの一つとなっている。こうした関心は、各種語彙リストや文学文書のような書記教育の教材と深くかかわる文書が、どこでどのように手写され、どのように西アジア各地に伝播していったのか、あるいは、法文書や行政文書にみられる地方的な個性や伝統はどのように生まれ、異なる伝統は互いにどのように関連しているのか、といった書記伝統の拡散と地方的発展のプロセスという壮大なテーマに連なっている。第1回の研究会議は、前2千年紀のメソポタミア・シリアという枠組みで、この問題を取り上げるものである。

日本に会場を設定したことに意義を持たせたいという期待もあり、会議は、池田潤による日本語の文字システムと楔形文字システムを対照的に論ずる講演で幕を開け、その後、メソポタミアとシリアの書記教育と書記伝統の諸相に関連する発表が行われた。発表には、古バビロニア時代とカッシート時代のバビロニアの諸都市 (Veldhuis, Bartelmus) ならびに後期青銅器時代のエマル、ウガリット、ハットゥサにおける書記教育の実態やカリキュラムを問題にする発表 (Cohen, van Soldt, Weeden)、ユーフラテス中流域とハブル川流域のテルカヤタバトゥム/タベトゥ(テル・タバンの)の書記教育・書記伝統を論ずる発表 (Podany, Yamada, Shibata) が含まれている。また、度量衡システムとその書記教育における位置を論じる個性的研究 (Chambon) は、産業的实践と書記教育がどのように接点を持つのかを問う斬新な研究例を示してくれた。

(2) 第2回の研究会議は、当初、前2千年紀のユーフラテスとハブル流域の暦と祭礼をテーマにして行う予定であったが、研究の過程でより広い時空間を視野に収めての研究が必要になってきたことを考慮して、前8-7世紀に西アジアの広域を支配して、しばしば「世界初の帝国」と呼ばれる新アッシリア帝国をめぐる歴史的・文化的諸相をテーマに実施した。他の計画研究班と連携したほか、学術振興会の「日本・フィンランド2国間共同セミナー」支援経費の助成も得て、2014年12月11-13日の3日間、“Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources”(「新アッシリア研究における異種資料の相互作用・相互影響・相互補

完」)として、筑波大学キャンパスと筑波国際会議場において会議を開催した。

1980年代から複数の大規模プロジェクト (State Archives of Assyria Project [Helsinki]、Royal Inscriptions of Mesopotamia Project [Toronto]、Royal Inscriptions of Neo-Assyrian Period Project [Philadelphia, München]、Assur Project [Heidelberg, Berlin]等) が進展し、多様で大量の文書が文献学的に高い精度で体系的に編集・出版された。地図、人名事典、インターネットによる資料の公開等、斬新な研究ツールが提供されたことで、新たに研究が活性化された。こうして、多様なジャンルの文書を複合的に用いる応用研究を可能にする環境が整ってきた状況を踏まえ、研究会議は異種資料を複合的に用いて行う個別研究の発表を通して、新アッシリア時代の歴史と文化に関する応用研究の前線を探るという試みとして企画された。会議では、行政文書、法文書、書簡、王碑文、編年記、予兆文書、祈禱文書、文学文書、美術・図像資料、考古学的データなど、異なる史料を対比的・複合的に分析することで、為政者のイメージと政治的・行政的地位 (Fink, Radner)、高級官僚の軍事的・行政的役割 (Mattila)、アッシリアの行政州分割 (Yamada)、アッシリアとその周辺の歴史と地理 (Hasegawa, van Buylaere, Rollinger)、アッシリア軍の兵站 (Fuchs)、呪術や予兆観測と書簡、王碑文の文書的相関 (Luukko, Zamazalova)、祈禱と祭儀地理 (Shibata)、建築事業と記念碑文 (Novotny)、軍事的・政治的事件の諸相 (Ito, Novotny - Watanabe)、王碑文編集の問題点 (Frame)、ジェンダー (Svärd) といった多様なテーマに関する研究が発表され、活発な議論が交わされた。

(3) 2016年3月23-24日に筑波大学キャンパス内で実施した3回目の研究会議は、当初設定した主要な目的である前2千年紀の研究に回帰し、“Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC: Calendars and Festivals”(「前2千年紀のユーフラテス中流域とハブル流域における文化と社会：暦と祭礼」)として実施した。

前18世紀と前13-12世紀に由来する各種テル・タバンの文書に記録された暦の月名は、前2千年紀の周辺地域の暦と一定の共通性を持ちながら、時代とともに独自の変遷をとげていったことが、研究によって明らかになってきた。そこで、テル・タバンの文書の外に視野を広げ、前3千年紀半ばから前2千年紀のおわりまでの時代を通じて、メソポタミア・シリア各地の暦は、どのような個性を持ち、相互にどのような関係にあったのか(あるいは、なかったのか)を、各時代、各地域の暦を俎上に並べて考えてみようという企画である。2日間の会議を通じて、メソポタミア・シリアの広い時空間に確認される複数のカ

レンダー・システムの実態が、未公開のデータを含めて報告された。具体的には、前3千年紀メソポタミア各地の暦（Sallaberger, Maekawa）、前3千年紀末から前2千年紀初めのマリの暦（Colonna d'Istria）、前2千年紀前半のマリの暦と上下メソポタミア各地の暦（Charpin, Jacquet, Ziegler）、前2千年紀のテルカ、タバトゥム、エマルの暦（Rouault, Shibata, S. Yamada, Fleming, M. Yamada）、前2千年紀前半のアッシュルの暦（Michel）等に関する詳細が検討された。月の運行による太陰暦を基礎にしなが、農耕にとって重要な太陽の運行を太陰暦と連動させるため、暦はどのように調整されたのか、また農事や祭礼に係る月名は、暦の実態とどのような関係にあるのか、広域支配国家の「公的」暦と諸都市の「地方的」暦は、どのように共存し得るのか。こうした様々な問題について、それぞれの地域・時代の専門家の知見が共有された。

4. 研究成果

上記の3度の国際会議で報告された研究は、会議時とその後の更なる研究をへて、それぞれに、以下の3冊のモノグラフとして編集する計画を立て、最初の一冊はすでに2016年に出版を終え、残りの2冊の編集作業が進行中である。

S. Yamada and D. Shibata (eds.), *Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC, I: Scribal Education and Scribal Traditions*, Studia Chaburensia 5, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2016（既刊）

R. Mattila, D. Shibata, and S. Yamada (eds.), *Neo-Assyrian Sources in Context: Thematic Studies of Texts, History and Culture*, State Archives of Assyria Studies 30(?), Helsinki: Neo-Assyrian Text Corpus Project, 2017（近刊）

D. Shibata and S. Yamada (eds.), *Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC, II: Calendars and Festivals*, Studia Chaburensia 8(?), Wiesbaden: Harrassowitz, 2017（近刊）

こうした活動を通じて、特に前2千年紀初頭から前1千年紀前半にかけてのメソポタミアとシリアの各地における書記教育のカリキュラムならびに書記術の地方ごとの伝統、各地の暦と月名の異同と相互関係、アッシリア帝国の政治、行政、領土、宗教、社会の諸相が明らかになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（20件）

S. Yamada: “Transition Period” in: E. Frahm

(ed.), *A Companion to Assyria*, Malden, MA: Blackwell, 2017, pp. 108-116.（査読有）

Chikako E. Watanabe, “Association of the dog with healing power in Mesopotamia, in: M. Worthington and A. N. Stone (eds.), *At the Dawn of History: Ancient Near Eastern Studies in Honour of J. N. Postgate*, Winona Lake: Eisenbrauns, 2017, pp. 683-691.（査読有）

S. Yamada, “Old Babylonian School Exercises from Tell Taban,” in: S. Yamada and D. Shibata (eds.), *Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC*, vol. 1: *Scribal Education and Scribal Traditions*, Studia Chaburensia 6, Wiesbaden: Harrassowitz, 2016, pp. 45-68.（査読有）

I. Nakata, “*Nadītum*-Women in the Field Lease Contracts from Sippar,” *Orient* 51 (2016), pp. 95-109.（査読有）

I. Nakata, “*Nadītum*-Women Reflected in the Bequest Documents from Old Babylonian Sippar,”『古代オリエント博物館紀要』35号, 2016年6月, pp. 45-64.（査読有）

I. Nakata, “Economic Activities of *nadītum*-Women of Šamaš Reflected in the Field Sale Contracts (MHET II/1-6),” in: B. Lion and Cécile Michel (eds.), *The Role of Women in Work and Society in the Ancient Near East*, Studies in Ancient Near Eastern Records 13, Boston/Berlin: De Gruyter, 2016, pp. 255-269.（査読有）

Chikako E. Watanabe, “Philological and scientific analyses of cuneiform tablets housed in Sulaymaniyah (Slemani) Museum,” in: K. Kopanias and J. MacGinnis (eds.), *The Archaeology of the Kurdistan Region of Iraq and Adjacent Regions*, Oxford: Archaeopress, 2016, pp. 435-436.（査読なし）

渡辺千香子「動物が象徴する古代メソポタミアの精神世界」『関学西洋史論集』第39号、2016年3月, pp. 41-47.（査読なし）

渡辺千香子「メソポタミアの王権と日傘に関する考察」『大阪学院大学人文自然論叢』第69-70号(2015年), pp. 13-34.（査読なし）

Chikako E. Watanabe, “The symbolic role of animals in Babylon: A contextual approach to the lion, the bull and the *mušḫuššu*,” *Iraq* 77 (2015), pp. 249-259. (DOI: 10.1017/irq.2015.17.)（査読有）

S. Yamada, “Review article : Olivier Rouault, *Terqa Final Report 2: Les textes des saisons 5 à 9*, Bibliotheca Mesopotamica, Volume 29, Malibu: Undena Publications, 2011,” *Zeitschrift für Assyriologie* 104/1 (2014), pp. 107-112. (DOI: 10.1515/zava.1894.9.1.42)（査読有）

S. Yamada, “Inscriptions of Tiglath-pileser III: Chronographic-Literary Styles and the King’s Portrait,” *Orient* 49 (2014), pp. 167-179.（査読有）

中田一郎「シッパル出土の古バビロニア

時代小作契約文書に見るナディートゥムの経済活動』『古代メソポタミアの経済における女性の役割』唐橋文編『日本学術振興会国際交流事業補助金による二国間交流事業・フランスとの共同研究平成 23-26 年度研究成果報告書』、2014 年 12 月、pp. 102-120. (査読なし)

中田一郎「シッパル出土の古バビロニア時代小作契約文書に見るナディートゥムの経済活動」唐橋文編『独法日本学術振興会国際交流事業補助金による平成 23—26 年度研究成果報告書(研究課題: 古代メソポタミアの経済に置ける女性の役割)』、2014 年 12 月、pp. 102 - 120. (査読なし)

Chikako E. Watanabe, “Styles of Pictorial Narratives in Assurbanipal’s Reliefs,” in: M. Feldman and B. Brown (eds.), *Critical Approaches in Ancient Near Eastern Art*, Berlin/Boston, 2014, pp. 345–367. (査読有)

H. Numoto, D. Shibata, and S. Yamada, “Excavations at Tell Taban: Continuity and Transition in Local Traditions at Tabatum/Tabetu during the second Millennium BC,” in: D. Bonatz and L. Martin (eds.), *100 Jahre archäologische Feldforschungen in Nordost-Syrien - eine Bilanz*, Wiesbaden: Harrassowitz, 2013, pp. 167-179. (査読有)

S. Yamada, “Pudum Rotation List from Tell Taban and the Cultural Milieu of Tābatum in the Post-Hammurabi Period,” *Revue d’assyriologie et d’archéologie orientale* 105 (2011), pp. 137-156. (Published 2013, February) (査読有)

S. Yamada, “An Adoption Contract from Tell Taban, the Kings of the Land of Hana, and the Hana-style Scribal Tradition,” *Revue d’assyriologie et d’archéologie orientale* 105 (2011), pp. 61-84. (Published 2013, February) (査読有)

I. Nakata, “The God Itūr-Mēr in the Middle Euphrates Region during the Old Babylonian Period,” *Revue d’assyriologie et d’archéologie orientale*, 105 (2011), pp. 129-136. (Published 2013, February) (査読有)

渡辺千香子「第 1 章: メソポタミアの環境史 - 自然観・歴史展開・文化の視点から」佐藤洋一郎・谷口真人編『イエローベルトの環境史 - サヘルからシルクロードへ』、弘文堂、2013 年、pp. 22–39. (査読なし)

[学会発表](計 16 件)

山田重郎「新アッシリア時代のエポニム表とエポニム年代誌: 内容・形式の変化とその歴史的・思想的背景」(第 59 回シュメール研究会、早稲田大学戸山キャンパス 39 号館 6 階第 7 会議室、東京都・新宿区、2016 年 6 月 19 日)

D. Shibata and S. Yamada, “Calendars and

Festivals of Tabatum/Tabetu and its surroundings in the second millennium BC,” in: Conference “Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC: Calendars and Festivals” (2016.3.24, University of Tsukuba, Tsukuba, Ibaraki)

H. Numoto, D. Shibata and S. Yamada, “Excavations at Tell Taban: Culture and History at Tābatum/Tābetu during the second millennium B.C.,” in: International Syrian Congress on Archaeology and Cultural Heritage, December 2015, Beirut (2015.12.5, Beirut Rotana Hotel, Beirut, Lebanon)

渡辺千香子「動物が象徴する古代メソポタミアの精神世界」関西学院大学西洋史研究会第 18 回年次大会、2015 年 11 月 22 日(関西学院大学、兵庫県・西宮市)

山田重郎「新アッシリア王碑文の編年記録—スタイルの変化とその背景について」(第 58 回シュメール研究会、京都大学ユラシア文化研究センター、京都府・京都市、2015.6.28)

J. Novotny and C. E. Watanabe, “Identifying the four foreigners paying homage to Assurbanipal in BM ME 124945-6 through textual and pictorial sources”, in: 61st Rencontre Assyriologique Internationale, Geneva, 2015 年 6 月 22 日(スイス、ジュネーブ、ジュネーブ大学)

山田重郎「古バビロニア時代のタバトゥム(テル・タバンの)書記教育」(日本オリエント学会第 57 回大会、北海道大学、北海道・札幌市、2015.10.18)

S. Yamada, “Neo-Assyrian Eponym Lists and Eponym Chronicles: Stylistic variants and their historical-ideological background,” in: Melammu Symposium 9: Conceptualizing Past, Present and Future (2015.5.19, University of Helsinki, Finland)

S. Yamada, “Ulluba and Its Surroundings: Tiglath-pileser III’s province making facing the Urartian border reconsidered from royal inscriptions and letters,” in: Conference “Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources,” (December, 12, 2014, Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki)

山田重郎「楔形文字文書に見るメソポタミアのビールとワイン」(公開シンポジウム「古代西アジアの食文化: ワインとビールの物語」、早稲田大学戸山キャンパス、東京都・新宿区、2014 年 12 月 6 日)

S. Yamada, “Chronographic Patterns and the Sense of Chronology in the Neo-Assyrian Royal Inscriptions” in: International Meeting “Writing Neo-Assyrian History: Sources, problems and approaches” (2014, September 23, University of Helsinki, Finland)

I. Nakata, “*naditum*-women in the Documents of Bequest Published in MHET II.” 日本学術振興会二国間交流事業・フランスとの共同研究「古代メソポタミアの経済における女性の役割」第4回ワークショップ、2014年5月26日(中央大学、東京都・八王子市)

J. Novotny & Chikako E. Watanabe, “Unraveling the mystery of an unrecorded event: identifying the four foreigners paying homage to Ashurbanipal in BM ME 124945-6” in: Conference “Interaction, Interplay and Combined Use of Different Sources in Neo-Assyrian Studies: Monumental Texts and Archival Sources,” (2014年12月19日, つくば国際会議場, 茨城県・つくば市)

I. Nakata, “Economic Activities of *naditum*-women of Šamaš as Reflected in the Field Sales Contracts Published in MHET II/1-6.” 日本学術振興会二国間交流事業・フランスとの共同研究「古代メソポタミアの経済における女性の役割」第5回ワークショップ、2014年11月6日、パリ第10大学(ナンテール、フランス)

S. Yamada, “Old Babylonian School Exercises from Tell Taban,” in: Conference “Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC: Scribal Education and Scribal Tradition” (December, 5, 2013, University of Tsukuba, Tsukuba, Ibaraki)

S. Yamada, “Inscriptions of Tiglath-pileser III: Stylistic Historiographic Features” in: Conference “Assyrian Scribal Art: Assyrian Royal Inscriptions and Library Texts” (2012.5.10, University of Tsukuba, Tsukuba, Ibaraki)

〔図書〕(計2件)

山田重郎 『ネブカドネザル 2 世—バビロンの再建者』(世界史リブレット「人」シリーズ 003) 山川出版社、2017年1月(全100頁)

S. Yamada and D. Shibata (eds.), *Cultures and Societies in the Middle Euphrates and Habur Areas in the Second Millennium BC, I: Scribal Education and Scribal Traditions*, Studia Chaburensia 5, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2016. 197pp.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 重郎 (YAMADA, Shigeo)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 30323223

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

中田 一郎 (NAKATA, Ichiro)
(財) 古代オリエント博物館・館長
研究者番号: 50119541

渡辺 千香子 (WATANABE, Chikako)
大阪学院大学・国際学部・准教授
研究者番号: 40290233

(4) 研究協力者

Stefan M. MAUL (ハイデルベルク大学・教授)

Nele ZIEGLER (フランス CNRS・上級研究員)